

都藝泥布

酷暑が続いておりますが、会員各位におかれては、お変わりなくお過ごしでしょうか。2025年4月27日（日）の総会・講演会について以下にご報告します。

総会では、会員数の減少による財政難の問題、発表者の固定化などを課題として報告しました。第二号議案では、会報『都藝泥布』の紙媒体による発行から、ホームページからのダウンロード方式、電子メールの添付ファイルでの配信に切り換えることを提案し、了承されました。（希望者には紙媒体で郵送）これについては、ハガキを同封していますので、ご確認ください。

冒頭、総会の成立要件について質問がでました。慣例によって委任状をとらず実施してきましたので、来年度の課題にしたいと思います。

第三号議案の人事では、運営委員会に山内卓郎氏、新理事に沖村由香氏が選出されました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

講演Ⅰ 京都由来の植物

講演者 肉戸 裕行氏（前京都府立植物園副園長）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

肉戸氏は、今春まで勤務しておられた府立植物園内の半木なからぎの森から話を始められた。自然林をそのまま取り入れたエリアであり、榎や棕の大樹がうっそうと生い茂っている。「半木」＝「流木」の伝承を紹介されつつ、平安京遷都以前の樹相の面影を残す貴重な森だと指摘された。



（肉戸 裕行氏）

京都地名研究会 会報 第88号

令和7年8月30日 発行

題字「つぎねふ」（山城の枕詞）

揮毫 吉田 金彦氏（初代会長）

編集 京都地名研究会事務局

「布団着て寝たる姿や東山」（嵐雪）の句で知られる「東山三十六峰」について、比叡山（第1峰・848m）と大文字山（第11峰・465m）の間が繞んでいるが、かつては高い山が存在していたという。その山の御影石が浸食され、現在は白川の清き流れとして目を癒すと共に、庭園に欠かせない白川砂として重宝されている。そういえば、比叡山の登り道である雲母坂（きららざか）も、御影石に含まれる雲母に由来する名前である。

比叡山系と愛宕山（924m）の間の北山は、1,000m 足らず山頂が見事に水平に連なっている。この地の北山杉は有名だが、花脊の峰定山には高さ日本一の大杉（三本杉・62m）が存在する。また、地名を冠した名である芦生杉も多く見られる。雪圧によって枝が地面に接し、伏条台杉と呼ばれる何本もの太い幹を持つ独特の姿をしていて、その力強さを見る者を圧倒する。

谷間には、キブネギク（貴船）・キクタニギク（東山の菊谷）など、京の地名に因んだ野草も見られる。ラショウモンカツラは渡辺綱が羅生門で切り落とした鬼女の腕にちなむ名だが、花は可愛らしい。しかし、現在は多くの野草たちが鹿の食害を受けており、絶滅危惧種も少なくない。人と動物との共生の難しさを改めて思い知らされる話である。

また、桃山御陵の参道に並ぶショウナンボクは、かつての台湾総督府から「献上」されたもので、日本では非常に珍しい並木だそうである。

普段何気なく見過ごしている植物たちの生態や地名との関係等々、改めて考えさせられた有意義な講演であった。（小寺 慶昭記）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

講演 2 地名以前の「葛野」と多訓をもつ「葛」

－無文字時代の日本語を探る－

講演者 木村 紀子氏（奈良大学名誉教授）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

言語文化論・意味論
の研究者である木村
紀子氏は、『ヤマトコ
トバの考古学』（平凡
社 2009）『「食いも
の」の神語り 一言葉
が伝える太古の列島
食一』（角川選書 2015）



（木村 紀子氏）

『地名の原景 一列島にひびく原始の声一』（平凡社新書 2023）など多彩な著書・論文をもち、今更述べるまでもなく、「日本語」の成立に関して多くの高い業績をあげておられる。

今回の講演では、植物としての「葛」の多くの訓（よみ）に着目し、「葛野（かどの・かづの）」「葛城（かつらぎ）」「葛飾（かつしか）」あるいは「葛原（くづはら）」などの地名に隠された「葛」の原風景を探るものであった。なお、現在の感覚で葛といえば、野原にはびこる厄介な雑草か、せいぜい根から葛粉が採れるといった認識であろうが、蔓の繊維からは葛布が織られ、葛粉は葛根湯などの漢方薬の材料ともなる有用植物なのである。

葛の多訓については、記紀・万葉にカヅラ（カヅ・ヅラ）やクズの両訓がみられ、葛井連や葛井寺などの氏名・寺名ではフヂヅと訓まれる。なお、『倭名類聚抄』では、十巻本・二十巻本ともに「草木部」の「葛類」にこれらの訓が用いられており、広く蔓性植物の総称となっている。その他、『日本書紀』顕宗天皇即位前紀他には、「稚室葛根（ワカムロツナネ）」と「ツナ」の訓があり、同じ景行天皇紀他では、出雲健の太刀と関連して「葛多巻（ツヅラサハマキ）」と「ツヅラ」の訓がある。

「クズ・カヅラ・フヂ」の訓は蔓性植物の総称としても、「クズ・カヅラ」の訓は真葛（まぐず）と特定しなくても和名抄で言う葛（クズカヅラ）であり、カヅラの訓は「縵・鬘」などの字が宛てられても本来の素材は葛で、神が降りる標としてのカヅラなのである。玉鬘・弟鬘などの用例から明らかである。「ツナ」の訓は「つなぐ・つな引き・きづな」などの言葉に通じ、用材としての葛を結ったり編んだりして縄や籠が出来上がる。「ツヅラ」の訓は出雲系の言葉であった可能性を指摘し、くに引き神話を彷彿とさせた。「九十九折り・葛籠」として現在に残る。葛の多様な訓は、列島における無文字時代の文化や地域性を教えてくれるのである。

講演の最後は、「消えた結縄文化」として、万葉歌の「延ふ葛」（423 番歌）や「玉葛」（443 番歌）の用例に着目し、そこに過去や将来への遠長い時間のイメージを指摘する。「記憶を手繰る」「日程を繰り延べる」「歴史は繰り返す」などの「繰る」行為は、まさにツナの結び目を繰って日数や月齢を読む（数える）「暦」であり、世界各地に結縄文化として民族例が知られている。無文字時代の日本語を知る貴重な時間であった。（中島 正 記）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

地名ウォークⅡ（6月14日実施）

「北野天満宮とあまり知られていない17の謎」

に参加して 山内 卓郎（本会理事）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

北野天満宮は菅原道真公（菅公）を御祭神としてまつる全国約 1 万 2000 社の天満宮・天神社の総本社で、学問の神様として知られる。菅公は右大臣の職から大宰府へ左遷され、延暦 3 年（903 年）に大宰府で死去した。菅公の怨霊を鎮めるため天暦元年（947 年）に創建、その後天神信仰と結びつき国家の守護神として崇められてきた。江戸時代には学問をよく修めた人物として菅公が寺子屋で広く知られるようになり、全国で崇敬されるようになっ

た。境内には菅公と縁の深い牛像と並んで狛犬も多い。

今回の解説は小寺慶昭会長。京都と周辺の神社を巡って参道に置かれた狛犬をひとつひとつ実地調査したご経験があり、深い見識に基づく話に引き込まれる。

狛犬とは、広辞苑には「神社の社頭や社殿の前に据え置かれる一対の獅子に似た獣の像。(以下略)」とあるが、頭の上に角があるものが狛犬、角がないものが獅子である。参道に置かれる狛犬は「獅子と狛犬で一対」が原則であるものの、小寺会長によると「獅子と獅子」「狛犬と狛犬」という例外もあるという。口の形（開けるか閉じるか）や配置（向かって右か左か）もさまざまである。

参道の狛犬寄進が流行するのは意外に新しく、江戸中期の大坂から始まった。素材となる石の産地・石工集団の存在・消費地の組合せで、江戸中心の関東地方、大坂から瀬戸内地方、出雲やその他の日本海側、などいくつかの文化圏に分かれる。京都に残る狛犬は古いものは大坂産で、京都の石工が作る狛犬は遅れて現れる。大坂産は加工しやすい和泉砂岩を素材に流行のスタイルを数多く制作していたのに対し、高い技術を誇る京都では硬い御影石に緻密な彫りで上質な狛犬を残した。

さて北野天満宮の境内に点在する「謎」を解明していく。

【謎】影向の松の前にある明治 16 年（1883 年）寄進の狛犬の目に残っている痕跡は？

ガラス製の眼球を外側からはめ込み隙間をモルタルで埋めたもので、参拝客は狛犬に睨まれている気分になったであろう。今はモルタルが劣化し眼球が抜け落ちた姿である。

【謎】三光門前にある吽形の狛犬の頭の角がどこか変な理由は？

以前は角がなく獅子かと思われてきたが、小寺会長の実地調査で頭頂に穴が発見され狛犬と断定された。御影石で角を新たに作ったが、体と角の石の色の違いが出てしまった。

【謎】表参道にいる長州藩寄進の狛犬をめぐって起こった「酉の刻の怪異」とは？

長州藩は幕末に狛犬を奉納した。2 年後の蛤御門の変により京都を追われ、狛犬は置き去りにされた。社伝によれば、京都守護の者たちが撤去しようとしたところ、酉の刻（＝18 時頃）に天候が急変し、雷鳴がとどろいた。菅公の怒りに触れたとして中止され、今も境内に残されたままである。

菅公が「火雷天神」と呼ばれ防火のご利益があることは今回初めて学んだ。ほとんど知られないのは京都で防火といえば愛宕神社が有名だからであろう。

今回の地名ウォークは雨天にもかかわらず事前告知のおかげで大幅増の 26 人が参加くださった。やはりここは学ぶ人を呼び寄せる場所なのだとあらためて認識した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

第 65 回地名フォーラムご案内

丹波の文化を伝承する会 共催

後援 京丹後市教育委員会

日時 2025 年 9 月 28 日（日）

会場 峰山町地域公民館（峰山駅徒歩 5 分）



ルート 1 (JR)

京都駅	8:36 発	JR 特急はしだて 1 号
天橋立駅	10:40 着	終点
天橋立駅	10:44 発	京都丹後鉄道宮豊線
峰山駅着	11:11 着	公民館まで歩いて 5 分

5,350 円（所要 2 時間 38 分）

ルート2 (バス+JR)

京都駅前 9:00 発 高速バス(丹海バス)
天橋立駅 11:05 着 高速バス(丹海バス)
天橋立駅 11:32 発 京都丹後鉄道宮豊線
峰山駅着 12:13 着 公民館まで歩いて 5 分

3,650 円(所要 3 時間 30 分)

地名フォーラム次第

13:00~13:10 挨拶 小寺 慶昭会長

13:10~14:10 発表①

「木簡からみた丹後風土記残欠」

丹波の文化を伝承する会会長

藤村 裕孝氏

14:20~15:20 発表②

「丹波と^{つるお}尾遺跡」

京丹後市教育委員会文化財保存活用課課長補佐

岡林 峰夫氏

15:30~16:30 発表③

「古代^{たには}旦波と網野銚子山古墳」

京丹後市史跡整備検討委員会会長

三浦 到氏

16:50~18:30 懇親会(別会場)

①藤村裕孝氏 略歴

1943 年 8 月 12 日 京都府中郡峰山町丹波生まれ
奥丹後地方史研究会会員、丹後資料館友の会会員
平成 17 年、丹波の文化を伝承する会創立メンバ
ー(現在会長)

①発表要旨

1、『丹後風土記残欠』の主な研究

①邨岡良弼氏の偽書説、②舞鶴市井上金次郎
氏と加藤晃氏 ③皇学館大学教授・荊木博士

2、『丹後風土記残欠』とは

長享二年(1483)海部智海は資益王家蔵本
を写本

概略 ①郡名に笠郡、匏郡、田庭郡

②神社数は 35 社

③漢文体ではない「被」文体が 2ヶ所

④當国風土記

⑤海部直や祖神

⑥大宝元年の大地震

3、京丹後市博士育成講座の丹後国木簡一覧表か らみた『丹後風土記残欠』

4、国宝『勘注系図』の當国風土記

5、結論

①偽書説が覆っていない

②風土記の体をしていない(被文体が在
る。海部直や祖神の記載)

③丹波本字田庭訓多尔波在當国風土記

④旦波国が丹波国に替えられる

②大宝元年三の大地震

以上から、国宝の品位・品格について考えざる
を得ない者の一人です。

②岡林峰夫氏 略歴

兵庫県神戸市出身。龍谷大学文学部史学科卒業後、
平成 7 年に峰山町教育委員会に入職。文化財担当と
して、主に埋蔵文化財発掘調査に携わる。平成 16
年京丹後市に合併後も引き続き現在まで市内の埋
蔵文化財発掘調査に携わっている。

②発表要旨

京丹後市峰山町に「丹波」と呼ばれる地名がある。
「和名類聚抄」に見える丹後国丹波郡七郷の一つで
あり、和銅 6 年(713)の丹後国分国以前は旧丹波
国の中心地であったと推測される土地である。

近年、この丹波地内の「^{つるお}尾」という場所から奈
良時代の遺跡が発見された。峰山町内にて奈良時代
の遺跡が発掘されるのは初めてのことである。調査
面積は小規模ながら、九九木簡をはじめとする文字
資料や、斎串や人形などの祭祀具が出土し、公的な
施設が存在した可能性が指摘されている。この地に
郡衙など役所関係の施設が存在していた蓋然性が
高まったと言えるだろう。

しかし、いま丹波の小字を調べてみても、わずかに
小字三宅が存在するのみで、関連すると思われる地
名は乏しい。正確な位置の推定には、なお課題が残
る。

③三浦 到氏略歴 両丹考古学研究会長

1948 年 7 月 京丹後市網野町浅茂川生まれ

1972 年 3 月 同志社大学文学部文化史学科卒業
(考古学専攻・森浩一ゼミ)

同年 4 月 網野町役場就職

(1979 ~2000 教育委員会で文化財担当)

2004 年 4 月 (京丹後市発足)

企画政策部長・生活環境部長を歴任

2009 年 3 月 京丹後市役所退職

2010 年 4 月~2014 年 3 月

京丹後市立丹後古代の里資料館長

2017 年 4 月～2025 年 3 月

京丹後市史跡整備検討委員会委員長

著書

森浩一・高野陽子・三浦到『京都の歴史を足元からさぐる/ 丹後・丹波・乙訓の巻』

学生社 2010 年

③発表要旨

古墳時代前期後半にあたる 4 世紀後半、陵墓に匹敵する墳長 201m の巨大前方後円墳である網野銚子山古墳（以下、「銚子山」という。）が、なぜ丹後半島に造られたのかについては、古墳時代の歴史を考える上でも大きな謎であった。今回、あしかけ 40 年にわたる発掘調査の成果と古墳研究者の新たな視点をもとに総合的に考察した結果、その謎の解明にたどり着くことができた。「全国の巨大古墳の中で銚子山が占める位置、古代丹波の中心地ではなく丹後半島沿岸に築造された理由、銚子山の墳丘築造の方法とその目的、銚子山と佐紀陵山古墳との関係、銚子山築造に際しヤマト王権が関与した内容、銚子山を実際に造った人々、4 世紀代の朝鮮半島の政治情勢とヤマト王権による半島派兵」など、先学の研究をもとに私見を加えて銚子山築造の謎について解明を試みる。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

歴史学と地名研究（第 2 回）

「魏志倭人伝」の地名

沖村 由香（本会理事）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

連載 2 回目は、『三国志』「魏志倭人伝」の「不弥国」という地名を取り上げてみます。「不弥国」は筑前国（福岡県）の宇美（『古事記』応神天皇生誕地）、または、穂波（『延喜式』筑前国穂波郡）にあてる二説が有力とされてきました。これについて、歴史家の河村哲夫氏は次のように述べています。

江戸時代の新井白石や本居宣長などは、不弥国の所在地を糟屋郡の宇美に比定したが、この説が最も常識的で妥当な結論であ

ろう。

【理由①】不弥と宇美は発音がよく似ている。不弥国(fu-mi) = 宇美(u-mi) ≠ 穂波(ho-na-mi) 穂波(飯塚)説は、不弥(fu-mi)と穂波(ho-na-mi)の発音がよく似ているということが根拠の一つとされているようであるが、宇美(u-mi)のほうがはるかに不弥(fu-mi)に近いことは明らかである。「ho-na-mi」の「na」の異質性を無視することは許されない。

（季刊「古代史ネット」第 11 号より）

河村氏は、「不弥」を日本漢字音を用いて「fu-mi」と解しています。しかし、『三国志』は三世紀の中国で書かれているため、地名は三世紀の漢字音で考える必要があります。

三世紀は上古音と中古音の中間の時期にあたり、『三国志』に使用された漢字の音韻体系は不明とされています。つまり、「不弥」や「邪馬台国」などの倭人国の地名が、当時どのように発音されていたかは明らかになっていないということです。

一方、日本漢字音には様々な中国の音韻体系が混在しています。その上、日本漢字音は日本人が発音しやすい形に変化して定着しています。日本漢字音を用いて、『三国志』の「不弥」を「フミ」と読んでも三世紀の読み方にはならないのです。

「穂波」という日本の地名の扱い方にも問題があります。穂波は現代日本語では「ホナミ」ですが、語頭の「ホ」の子音[h]は、奈良時代以前は両唇閉鎖音[p]、または両唇摩擦音[ɸ]だったと考えられています。これを三世紀の不弥国の候補の一つとして検討するのであれば、「ホナミ」ではなく、「ポナミ」や「フォナミ」を想定して考える必要があるでしょう。

邪馬台国研究家の代表として河村氏の説を引用しましたが、例外はあるものの多くの歴史研究者が

河村氏同様「魏志倭人伝」の地名を日本漢字音で読むことに疑問を感じておらず、「八行音」の音韻変化についても知識が乏しいように見えます。

この邪馬台国研究の状況を対岸の火事と見るのではなく、地名研究側でも古代地名をどう扱うべきかについて発信していく必要があるのかもしれない。

邪馬台国が何処にあったかの判定は歴史研究者に任せるとして、「魏志倭人伝」に記された地名を中国人がどのように発音していたのかは、いにしへの倭国の地名を考える上で興味深いテーマであると考えます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

地名随想②

「多賀駅はタガ、多賀小はタカ」

岩田 貢（本会理事）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

*文中〔 〕は筆者によるフリガナ

1. 疑問→理解

初めに、京都地名研究会といいつつ、府南部の局所的な話題になることをお詫びしたい。

私は京都府綴喜郡多賀村に生まれた。多賀は「タガ」と読む。だが、地元では多賀を「タカ」とも呼ぶ。1958（昭和33）年に井手町と合併した際に井手町大字多賀となった。8歳の時であった。それより年少の時、同年齢の子ども達と共に年上の小学生に従い、“お宮さん”の杜へよく行った。チャンバラごっこが目的である。境内では忠魂碑の囲いや神馬を外した石の台座など、隠れたり登ったりするのに事欠かなかった。

その中で、一の鳥居近くにある「高神社」と刻まれた大きな石碑が気になって仕方がなかった。上級生から「タカジンジャ」と教えてもらった。「高」とは何か、不思議に思った。

すでに「タガ」が土地の正式な呼び名であるらしいと知っていたからである。集落待望の末、1955（昭和30）年7月に国鉄奈良線に山城多賀〔タガ〕駅が開業した。滋賀県に多賀大社という有名な神社があることも知った。そちらは“おたがさん”とも呼ばれるところで、同じ「タガ」で何かの関係にあるのかなとも思っていた。

しかし再び混乱することになった。1873（明治6）年6月創立と古い歴史を有する多賀小学校に入学したときである。「タカショウ」と言うのである。1959年に制定された校歌でも♪たかのやま♪と詠われる。「タガ」なのか「タカ」なのか、おさな心に疑問が生じた。

地名に関心をもつようになり、1991（平成3）年発行の『角川日本地名大辞典 26 京都府上巻』を調べてみた。そこでの記述は「たが 多賀<井手町>古くは多河・高とも書いた」で始まる。

当書には、代表的な史料上の表記（初見?）が複数載っているので整理をしてみる。

高：『万葉集』（奈良末期）「山背高槻村散去奚留鴨」槻村（櫨の群）がある「高」

高：『新撰姓氏録』（平安初期）左京諸蕃下に「高史」「高」氏の名

高：『延喜式』（平安中期）神名帳に「高神社」

多可：『和名抄』（平安中期）山城国綴喜郡十郷の1つ。高山寺本の訓

多河：『和名抄』（平安中期）山城国綴喜郡十郷の1つ。刊本の訓

多賀：『東大寺要録』根本僧正<諱良弁>耆老相伝（平安後期）に「山城国多賀」

これだけで判断すれば、「高」が初めにあり、奈良初期の「好字二数字化令」を経て、平安時代には様々な表記になったのではないかと想像できる。「河」は力ともガとも読めるので、「高」→「多可・多河」、「多河」→「多賀」のような表記に変化したのではとも考えるが、国語学に疎い自分には分からない。

ただ多賀地区の川は木津川に西流する南谷川だけが主なので、漢字の意味だけに注目すれば「多河」は当たらない。

加えて以前読んだ、段熙麟〔タンヒリン〕(1976)『日本に残る古代朝鮮 近畿編』創元社を思い出した。延喜式内社の高〔タカ〕神社は高氏の氏神を祀ったもので、高氏は『新撰姓氏録』中に「高は高麗国人、高助斤の後孫である」等と記されている高句麗系渡来人であった旨の記述である。多賀がある南山城地域には、上粕・下粕・高麗・粕田等の渡来人に関係すると推定できる地名がいくつもみられる。文献以外に考古学的資料等がみられないこともあり、これらの解釈に違和感はなかった。

2. 観察→確信

昨年初夏、「小学校校歌に登場する地名－山背古道に沿って－」という題で話をする機会をいただいた。会を主催されたのは「山背古道探検隊」で、現隊長には本会会員でもある小西亘氏が就いておられる。

山背古道とは、旧街道も含めながら、1996年に木津町・山城町(2007年3月に加茂町と共に木津川市に合併)・井手町・城陽市の4市町を辿れるように、山背古道推進協議会が指定されたものである。南北の両起点が木津川市の上人ヶ平〔ショウニンガヒラ〕遺跡公園とJR城陽駅とで、道の全長が約25kmある。古墳や歴史ある神社・古刹、旧集落を散策できるいわば南山城版“山の辺の道”である。

主に田に利用されている木津川の氾濫原は、上流の木津近辺で標高が約30mある。下流の寺田までの直線距離が約15kmあり、高さで約15m漸減する1000分の1勾配の平坦地が続く。古道が曲がりながらつなぐ集落は、洪水被害の及ばない微高地もしくは段丘上にある。

話題として、山背古道を歩く際の目安とするため各地の小学校校歌に登場する地名を紹介しようと

考えた。多数の遺跡や社寺が連続する南山城の木津川右岸地域では、1953年の大水害を除けば自然災害等での集落移転の歴史もまれで、明治期に存在した集落の多くは古代からの居住域を継承していると思われる。明治期(1868～1912年)設立の小学校は、役場と並ぶ当時の主要公共施設であり、集落内か側に建てられた場合が多い。したがって古くから現地にある小学校は、元々の居住域に近いと考えられる。

資料として、Web上に公開されている地理院地図で、古道沿いの小学校の標高を調べてみた。現在地建設時期は各校HPから読み取ったものである。

木津川市

木津小(31.5m) 1872年現在地に開校

上粕小(31.8m) 1873年 //

棚倉小(28.2m) 1914年現在地に移転
井手町

井手小(32.5m) 1929年現在地に移転

多賀小(34.9m) 1910年 //

城陽市

青谷小(23.5m) 1892年現在地に移転

富野小(19.7m) 1873年現在地に開校

寺田南小(19.3m) 1974年 //

寺田小(21.5m) 1873年 //

9校中では多賀小の標高が最大値であるが、平面的な地図と数値を眺めているだけでは実感がわかない。映像で観察するために、Googleストリートビューで各校の立地状況をみた。同ビューでJR多賀駅西側の低地から東方を眺めれば、多賀小が建つ位置が一目瞭然で分かる。幼い頃から見慣れているとはいえ、その風景に改めて驚かされた。高さが際立っているのである。

多賀小はJR多賀駅東側で、田からの標高差13mの崖上にある。崖は低位段丘と呼ばれる約1～7万年前頃に形成された台地の西端に当たる。台上は水利上水田には不向きだが、居住や畑作には利用でき

る。先述の集落立地の状況を踏まえれば、古代における多賀の居住域の一部は、多賀小の背後に広がる台地上にあったことに間違いない。その地を人々は見上げていたのだ。

「高」について、『新編 大言海』（富山房、1982）では、以下の記述が見られる。

たか(名)高 たハ、肥前國高〔タ〕久郷、薩摩國高城郡多岐、豊後國日高郡比多（今、日田）ノ如ク、た二高[コウ]ノ意アリ、高處〔タカ〕ナリ、中處〔ナカ〕二同ジ

「高處〔タカ〕」にあった集落だから「高」なのか、それなら納得がいく。無論、渡来人由来の地名である蓋然性は否定できない。しかしこれ以降、私自身は地形説を確信している。

●○受贈図書及び資料紹介●ご寄贈に感謝します。

(1)『熊本乃地名』 第 281～286 号

熊本地名研究会

(2)『加越能の地名』No.65

加越能地名の会

(3)『地名と風土』第 18 号 25 年 7 月 15 日

日本地名研究所

同封したハガキの扱い方について

会報『都藝泥布』の受け取り方法について、次の選択肢からお選びください。

①京都地名研究会のホームページから PDF ファイル化された会報を自分でダウンロードします。

②電子メールに添付された PDF ファイルを受け取ります。

③紙に印刷された会報を郵送で受け取ります。

※ご希望の番号を上記から一つ選び、下記の電子メールアドレス宛に送信してください。「ご氏名」・「メールアドレス」「電話番号」も必ず記入してください。 kyotochimei@gmail.com

③をご希望の方でメール送信が難しい方に限り、回答欄に必要事項を記入し、はがきに 85 円切手を貼

って投函してください。

地名ウォーク予告 (別紙参照)

日時 2025 年 11 月 8 日 (土) 9:30～12:00 頃

テーマ「山科本願寺跡を歩く」

講師 岩田 貢理事 要予約

090-6916-6837 入江まで

集合 9:30 地下鉄東西線「東野」駅改札付近

計報 本会理事久保田孝夫氏 本年 3 月 16 日

逝去 ご冥福をお祈りします

京都地名研究会への入会案内

千年の都、京都。ここを起点として近畿から国の内外に及び地名を広く細かく蒐集し、比較調査して、地名を学ぶ学会です。地名は歴史の鏡であり、文化を盛る器です。私たちの暮らしのもとにある地名に目を向けて、日本の文化と歴史認識をいっそう深め、地域の知的活性化に役立ちたいと念じます。年齢、職業などの如何を問わず、いつでも、どなたでも、地名文化に関心をもたれる方々のご参加を歓迎し、ご協力もお願いします。入会金不要。

詳細はホームページをご覧ください。

年会費 3000 円

賛助会員・理事 5000 円

家族会員 1000 円

お問い合わせ先

京都地名研究会事務局 入江 成治

Tel 090-6916-6837

E-mail : kyotochimei@gmail.com

会費納入先 口座名 ゆうちょ銀行

加入者名：京都地名研究会

口座記号番号：00910-1-160705

本会ホームページアドレス

<https://kyotochimei.wixsite.com/kyotochimei>